
男のオレが、転生でとある魔術の男の麦野に転生！！

ロンパニール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男のオレが、転生でとある魔術の男の麦野に転生！！

【Nコード】

N5846X

【作者名】

ロンパニール

【あらすじ】

ある日、遊んでいた神に間違っで殺された少年は、神に怒鳴りながらとある魔術の世界の麦野に転生する。しかし、麦野は男になっていた。またもや怒鳴りながら、少年は生きていく。赤ん坊から始まり、アイテムを作り、「闇」の世界で生き人を殺し続ける。

そんな生活の中、少年は綺麗な容姿から男からも女からも目ぼれされ続け、ついには、レベル5の垣根にも目ぼれされる。※垣根が変態化しています！注意！

「ひいっ!!!!!!!!!!ごっごめんなさい!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

オレがそう怒鳴ると、目の前にクソガキは涙目で謝る。
ガキだが、コイツは上位の神らしい。
でっ、なーんかこいつがふざけたことぬかしやがったんだよなあ、
なんだったっけなあ？

「確かー間違っで殺しちゃったとか言っただよなあ・・・なあ
？」

「そ・・・そうです・・・すみませ」

「ふざけんなああああああああああああああああああ!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「ごめんなさああああああいいいいいいいい!!!!!!!!!!!!
(涙)」

ふざけんなよお!!!!!!!!!!何が間違っで殺しちゃいましただあ!!!!!!?

アアン!!!!!!?

「遊んでて間違っで運命を捻じ曲げちゃった★」とか言われて「仕方ないね★」とかですまされると思ってんのかよお!!!!? クソ神いいいいいい!!!!!!

「だからから・・・違う世界に転生させようと・・・どんな世界でもいけますよーーーー!!!!!!」
だから許してーーーー!!!!!!」

その言葉でオレは止まる。
どんな世界でも? じゃあ・・・

「じゃあ」とある魔術と禁書目録」でもか?

「あっはい、もっちろん! それ★」

ガキがなんか変なステッキ降り始めた。
すると、オレは足元に違和感を感じた。
下を見てみると、穴が開いていた。
直ぐにその穴に落ちていく。

「ちよっ!!!!!! まだ誰に転生するとかいってねえだろおがあ!!!!!!
!!!!!!」

「大丈夫です★あなたの性格にぴったしな人ですし、性別も変えま
すから★・・・やっとな怒られなくてすむ・・・」

「テメー!!!!!! グラァッ!!!!!! 今の本音だろおとおおとおおお

お!!!!!!!!!!!!!!」

怒鳴っているうちにも、オレは落ち続ける。

ガキの姿も見えなくなっちゃった。

もしまた会ったら殺そう。そう思った次の瞬間、オレの意識はなくなっ

第2話 10歳です

ん？なんか目の前がいきなり明るくなった。

頭が痛い・・・えーと・・・オレは何してたんだっけ？

確か・・・クソ神に間違って殺されて、それでとある魔術の世界に転生して・・・

そういや、俺って誰に転生したんだ？

そう思い、オレは瞼を開ける。

すると、視界に入ったのは笑顔の女と男だった。

あれ？と思い、オレは何度も瞬きをする。

駄目だ、消えねえ。てっことは夢じゃない・・・

・・・いや待て待て待てい！！

オレは知らねえぞこいつら！！会ったこともねえ！！

何でオレのことニコニコしながらみてんだよおおおおおお！！！！

気持ち悪い！一発殴って逃げ・・・

手足を動かそうとして違和感を感じた、動きにく！！何これ動きにく！！

この服動きにく！！何度でもいう、動きにく！！！！

オレは自分の手をみる、すると、オレの手は赤ん坊のように小さかった。

ん？何でオレの手小さいんだ？もしかしてあの神、腹の中にいたときに転生させたのか？そうなのか？だとしたら・・・

ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・だな

あつこれオレの口癖。

とりあえず、あの神は次あったら絶対殺す、原型とどめない様に穴あきにしてやる。

そう誓い、オレは眠った。

もうこの状況を突破するには眠るしかない判断したからだ。

あれから何年たっただろう。

10年だ。つまりオレは10歳だ、小5だ。

いや、オレも結構大きくなったな。

てか、オレは誰に転生したのか分かった。麦野だ。麦野沈利だ。

だけどなあ、おかしいことにオレは男だ。つまり麦野が男になってたんだよ。

名前もちよーと変わって麦野 沈鳴^{しずなり}。へへ、沈男じゃなくてよかつたぜ・・なんか男だとありきたりすぎるからな。

今のところ、クソ神は一度も現れていない。くそっ早く出てこいよ。赤い綺麗な死体にしてやるからよおおおおおおおおお！！！！

とつまあ、本題に入るか。てか、何話せばいいんだ？
とりあえず、オレの親は大金もちだった。

しかも一人息子のオレに超超ちよーくう甘い！！
オレがあればほしいなくて少しでもいえば買ってくれる。
金は大丈夫なのか気になったが、全然大丈夫だった。

メイドも召使もたくさんいるは、オレ専用の執事もいるわけでこりやたまらないね！

あー楽しい！！愉快だなあ！！！！

まっ、ここの暮らしは十分満足だ。

能力の方も満足だ。

オレは第4位だ。クソ、第4位って気に食わねえなあ、誰だあ？オレより上のやつは・・・

確かクソモヤシとクソメルヘンだったなあ？まあそれは仕方ない。
オレが気に食わねえのは第3位、御坂だああああああああああ
！！！！！！！！！！

何であんな年下の！！！！しかもメスの方が上なんだよおおおおお
おおおおおおおお！！！！！！！！

認めねえ！！認めねえぞお！！！！いつか絶対に殺してやあああああ
あああああるうううううう！！！！！！！！

第3話 仲間探しの旅……嘘だぜ

今、オレの目の間にはあのクソ神がいる。

「どうですか？新しい生活は」

「ああ、とってもいい。とつというわけでテメーを殺す」

「ええ……!? 意味がわからない……! 殺さないで……! ! ! ! !」

チツ、しようがない。

コイツには世話になったし、大目に見てやるよ。
オレはメルトダウンを撃とうとした手を下す。

「はあはあ……もう殺さない？」

「もう殺さない。たぶんな」

「たったぶん・・・まあいいか・・・今日で会うのは最後です。まっ、殺しちゃったお詫びに、あなたの能力の弱点をいろいろなくします」

「ああん？　そんなくらい当たり前だろおがよお！！！！！！！！」

「ひいっ！！ごめんなさい！！無くす弱点は反動を無くすとか、腕が吹き飛ぶほどの力をしてても大丈夫とかそんなものです・・・」

「ふうん・・・まっ、それならいいか。第一位になったら後々面倒だな」

許してやるよ。

仕方ねえ・・・

「じゃっ、もう用無しだ。帰れ」

「え・・・あ・・・はい・・・分かりました・・・」

この時のオレの表情を言ってやろう。
清々しい笑顔で帰れって言った。

長い年月が過ぎた。オレは高校2年だ。

まっ、ほとんど通わずに家の中にいたけどな。

だってなあ？ 簡単過ぎんだよ。問題が。

ノートとらなくてもテストは90点台とれるし・・・面白くねー。

とっ、言うわけで、こんな暇な生活を自分で変えてみようと思う。

まあ、とりあえず家から出ないといけねえな。

何しよっかな・・・

家から出たオレは、外をふらつく。

なぜか女子がキャーキャー黄色い声を上げるが無視する。

うるせえんだよ、キーキー泣くんじゃねえ。めざわりだなあ・・・いっそ殺してやろうか・・・

んっ・・・？殺す・・・？

いいこと思いついた！！原作の麦野もやってたことだからオレにもできるな！！

そう思い、オレは路地裏に入り、走り回った。

狙いは「闇」の世界の人間に会うため。

なんか面白そうじゃねえか。人をプチプチ殺すのはよお。

ひひひっと笑いながらオレは角を曲がる。

すると、だれかにぶつかった。

「いてえな！！ちゃんと前みやがれ！！」

見てなかったのはオレだがオレは謝らない。

オレが悪いなんて認めない。オレはいつだって正しい。

「はうっ・・・！！じゃなくて！！ぶつかってきたのはアナタって訳よ！！！」

「あんだと！！！！」

相手が顔を赤らめて変な声を出した気がしたが無視をする。
知らないガキに口答えされたことに頭に血が上る。

オレに向かってそんな口きいていいのか？その体真っ二つにするぜ。

「・・・？あなたって、「闇」の人間？・・・目が濁ってないけど・・・」

「あぁん？今からなろうと思ってたんだよ。テメー、「闇」の人間か？」

「「闇」のこと知ってるんだから、結局私は「闇」の人間って訳よ！
貴方は「闇」に入りたいの？だったら私としない？」

結局、アイテムって組織作ったわいいけど、メンバーが私しかないな
いって訳よ」

「ずいぶん寂しい組織だなオイ。てか、それ組織っていうのか？」

「細かいことは気にしない！！ねっ、いいでしょ！！？」

オレは考える。

確か・・・麦野が居たのは・・・「アイテム」・・・！！

・・・なんつー偶然だ。早速仲間が見つかった。これを逃したら次
はねえな。

「分かった分かった。ただし、リーダーはオレだ。オレは誰かの下につくなんてことは嫌だぜ」

「ええ！？それはちよつとワガママすぎるって訳よ！！」

「いいのか？オレが入らないとメンバーは増えない。それに・・・」

金髪頭の外国人のガキの耳に口を近づけ、続ける。

「断ったら・・・後悔するぞ・・・」

「／／／！！！！・・・わっ・・・分かってわけよ・・・」

脅したつもりでいったんだけどな・・・なんで顔が赤くなるんだ？
わかんねえな・・・まっ、いいか。リーダーになったからな。
オレはガキに手を伸ばす。

「オレの名前は麦野 沈鳴。よろしくな、クソガキ」

「ちよっ！！私にはちゃんとした名前があるって訳よ！！
私の名前はフレндаⅡセイヴェルン。フレндаってよんで。よろしくね、麦野」

俺たちは握手を交わした。

そして、次の日から仕事が始まり、オレは暗い世界の住人になった。

第4話 初任務は人殺し

あの後、フレンダのアドレスをもらい、オレは明日に備えて寝た。そして、今起きようとして睡魔と闘ってる。

だってなあ・・・いつも昼近くまで寝てるからな・・・眠い・・・でも起きないと・・・眠い・・・ねむ・・・zzzzはっ！！

駄目だ駄目！今日は早速の初任務じゃねえか！しっかりしろ！オレ！！

オレは一気にベットからでる。

ゆっくり出たら一生出れない気がしたからだ。

ニートって・・・いいな・・・

「遅いって訳よ！だいたい今日はせっかくの任務なんだよ！？なの
に……」

「うるせえ、オレに指図すんな」

集合場所に着いたらフレンダがギャーギャー言い始めた。

五月蠅いので眉間にしわをよせ、低い声で脅す。オレに説教するとはいい度胸じゃねえか。

殺してやろうか。いや、駄目だな。こいつを殺したらこの後の仲間
集めが大変になる。

「今日の任務はここで取引する人間を一人残らず殺すこと。
結局、最初の任務はこんなものって訳よ」

「へえ……腕ならしにちょうどいいな」

殺すだけか。これならメルトダウンー撃てば終わりだな。

正直、施設を気づかれずに破壊するとか細かい任務じゃなくてよかったぜ。

「いっとくけど、「表」の人間にばれないようにしないといけない
のよ?。」

・
・
・
・
・
チ
ツ
！

目的の場所に行き、取引をする「闇」の人間が来るのを隠れて待つ。どうせなら固まっているところを一気にやったほうが楽だからな。おっと、来た来た・・・

オレは息をひそめて一か所に固まるのを待つ。

すると、運よく、一か所に固まってくれた。ずいぶん馬鹿な奴らだな。

命を狙われてるとはしらずに・・・な？

オレはフレンダを見る。

フレンダはOKとサインをする。

オレはうなずくと、手を「闇」の人間に向け、撃つ準備を始める。すると、こっちに気付いたやつが銃を構えた。

遅いんだよ、ゴミ。

ギュオンッ！

「ひいっ!!」

[illegible]

恐怖に顔を歪め、断末魔をあげながらオレのメルトダウナーに飲み込まれていく。

いつものように物を壊すような感覚じゃない。何か・・・何か・・・命を消すような感覚？みたいな・・・

オレは笑う。

もう完全に「闇」の人間になった。

人を殺すのってこんなに楽しいんだな。

おもしれえ・おもしれえなオイ！！

オレは暫くの間笑っていたが、しばらくすると、ぽっかりと心が開いたようになってしまった。

なんだろう・・・空しいな。

オレはもう人間じゃない。

人を殺す「化け物」だ。

フレンダ

凄い・・・私は麦野の能力を見たとき、素直に思った。

あんなにいた人間を、たった一発で跡形も残さずに消し去った。

結局mレベル5の威力は、私の想像を超えてたって訳よ。

人を殺した後の麦野は狂ったように笑った。

口が引き裂けそうになるまで開き。

今は快感を感じてるんだろう。

だけど、すぐに空しくなるって訳よ。

私も最初はそうだったから。

だけど、結局、今でも人を殺した後は空しいって訳よ。

もう、私たちはもとはに戻れない。

第5話 慣れればいいんだ

「んじゃな、フレンダ」

「ばいばい、じゃっ、明日もよろしくって訳よ」

オレはフレンダに手を振り、家に向かう。

まだ心に空しさが残ってる。

オレは人を殺したんだ。もう「闇」の人間だ。「闇」の・・・

・・・人を・・・殺した・・・

オレはフラフラしながら家のドアを開ける。

家に入ると、家の匂いがして、なんだか落ち着いたが、心にあった空しさが喉にこみ上げてきた。

急いでトイレに向かい、胃の中のものと一緒に空しさもすべて吐き出す。

「げふっ！ごぶおっ！！・・・はぁ・・・はぁ・・・」

全て吐き出してから、自分のしたことを思い出し、もうほとんど出したのに、喉に指を入れ、さらに出す。

何でだ、人を殺すだけじゃねえか。女にもできたんだぞ、なんでオレにできねえんだ？

何でだ・・・なんで・・・ナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデ

初めて、人を殺して人の命の重さが分かった。

前の人生では、オレは好き放題して普通に「死ね」「殺すぞ」なんて言って喧嘩してた。

もちろん、人は何回も殴ったことはある。

・・・思い出した・・・初めて人を思いっきり殴った時、オレは今と同じような状態になったんだ・・・

でも、何回もやってるうちに慣れて・・・そうだ、慣れればいいんだ。なれたら、喧嘩の時みたいに普通に殺れる。

そうだ、何回も殺せばいいんだ。そうすればいいんだ。

そう思い、オレはその日、晩御飯を食べずに寝た。

「遅おおおおおおおい！！！！！！オレを待たせるとはいい度胸だなフレンダァ・・・」

「ひいーーーー！！ゆっ許しって訳よ！！」

「その？訳よ！？・・・はふざけんのかあああああああああああああ
ああ！！！！！！」

「ぎゃーーーーー！！」

キレる麦野と涙目で謝るフレンダ。

はたからみればイケメン不良が喧嘩を売ってるしか見えない。
周りが自分たちを見てるのに気付いた麦野は、フレンダを引っ張って路地裏に行く。

「たくっ、テメーのせいで勘違いされるじゃねえか」

「いや・・・結局、それは全部麦野のせいって訳・・・」

「ああん！！！！？？」

不良顔負けのすごい顔でフレンダを睨む。

フレンダはあまりの怖さに声も出せず、涙も出ず、その場に座り込み、がたがた震える。

「ちっ、さっさとしようぜ。今回も人を殺すだけ・・・うつ!!」

まただ・・・また吐き気が・・・

昨日から人を殺すのを考えるだけで吐き気がする。

しっかりしろ！オレ！！今日はこれをこくはくするために来たんだろうが。これくらいでへばってんじゃねえよ！！

オレは何とか吐くのを抑えると、動けないフレンダを引きずって目的地向かう。

・・・さっきので風紀委員とか呼ばれてねえよな？

辺り一面、真っ赤に染まる。

全部、オレが殺したやつの血だ。

オレはまだ息があるやつに向かって止めのメルトダウンを撃つ。
敵は跡形もなく消える。

今殺したので、だいたい30人くらいだな。

もう、吐き気はない。快感しかない。

そうだ、これでいいんだ。いちいち吐いてなんかいらねえ。オレはどんなことをしてでも進むんだ。

たとえば人を殺してでも。

「・・・フренда。あと何人くらいだ？」

「えーと・・・だいたい20人くらいね。結局、麦野にかかればあつというまって訳よ！」

「うーし。さっさと終わらす・・・ぞ!!」

固まってたやつに撃つ。

さっさと終わらせて寝よう。そうしないと気が持たない。

「おいおい、逃げ回ってんじゃないよ!! ゴミのくせに手間かけさせんなあ!!」

オレの性格も狂ってき始めた。

第6話 仲間＋2

ある日、いきなりフレンドが変なことを言い出した。

「もっと仲間が欲しいって訳よ!!」

「・・・はあ？」

携帯をいじるのをやめて、フレンドを睨む。

恐がらせたつもりなのに、なぜか頬を染められた。ドM？ドMなのか？まさかフレンドがそんなキャラだったなんて・・・!!

「バリ引くわ。近寄んな」

「何で！？じゃっなくて！結局、今のままじゃ少ないって訳よ！もっと仲間がいるの！」

バンバンと、ポテトを食べてた手で机をたたく。

おいおい、これこのファミレスの机だぞ、汚くなるだろうが。

後で机を拭かせよう、フレンドに。

「別にいいんじゃないの？別に二人でも、オレが居ればすぐに終わるじゃねえか」

そういったんだが、フレンダは納得しない。
めんどくせえな・・・

「だって、もし大きな施設で協力してやらなきゃいけないときに人数が足りなかったらどうするの？ やっぱ、後二人欲しい」

「・・・つまり、お前は喋る相手が欲しいのか？」

「なっなんで分かったって訳よ！！ テレパシー！！？ テレパシー！！？」

「馬鹿か。能力は一人一つまでだ。それくらいも分かんねえのかよ」

「それくらいは分かってるって訳よ！」

「そういい、ない胸を張る。
・・・貧乳だな。」

「今、何か失礼なこと考えなかった？」

「別に？」

「お前もテレパシーっぽいを使えんのかよ。」

プルルルルル・・・プルルルルル・・・ガチャ

「あゝ？お前かゝ？安心しろ、今日は厄介ごとじゃねえよ。二人くらいアイテムに仲間が欲しくってなあ。二人よこせ。ああん？能力者だぞ、レベル4じゃないとだめだ。男でも女でもいい」「女子がいいって訳よ！！」・・・どっちも女だ。じゃあ、よろしくな」

電話を切る。

今、かけてたのは、「闇」で知り合ったやつだ。

脅してアドレスもらった。

まあ、これで仲間の心配はねえな。

「うーし、サバ缶でも買いに行くか」

「あっ、私も買う！」

俺たちは店に向かう。

俺たちは、サバ缶を大量に買い、アジトで食べている。
大量に買ったら、なんかあのモヤシみたいだな。

そう思いながら、二つ目を開ける。

うん、やっぱりサバ缶はうまいな。フрендаとオレって結構気が合
うんじゃない？

「結局！サバ缶は最高っ！！て訳よ！！！！」

「おう、とうとう頭がおかしくなったか？」

「なっていない！いたって正常！」

フрендаをからかいながら、仲間が来るのを待つ。
アイツは仕事だけは早いからな、すぐに来るだろ。

「あなたたちが、『アイテム』ですか？」

「かっこいいひと・・・」

おっ、来たな。

なんか滝壺が変なことやってたけど無視だ無視。オレはいたって普通の顔だ。カッコイイなんてありえねえ。とりあえず、自己紹介からだな。

「ああ、オレは『アイテム』のリーダー。麦野^{むぎの} 沈鳴^{しずなり}だ。こいつはアホメア」

「ちょっと！違う！！あつ、麦野のことは無視してね。私の名前はフレンダⅡセイヴェルン。よろしくって訳よ！」

フレンダが手を出すと、スカートの丈がギリギリのガキが握りかえした。

とあえず、オレのことを無視していいとかいいやがったから拳骨5発くらわしといた。

「私の名前は絹旗^{きぬはた} 最愛^{さいあい}です。超頑張りますんで。よろしくです」

「滝壺^{たきつぼ} 理后^{りこう}。よろしく」

オレはまじまじと二人を見る。

正直言つて、オレは『アイテム』に興味なかったし、アニメは見てねえ、漫画は『とある科学の超電磁砲^{レールガン}』の一巻しか持ってなかった。『アイテム』のメンバーって個性豊かだな。

これから面白そうだな。

オレはふつと笑う。

すると、なぜかガキ3人がこっちみて顔を赤く染めた。
ん？オレなんか卑猥なこといったかしたか？

「何で顔赤くなってんだ？」

「・・・ちよっ超なんでもありません！！！！本当に！！！」

「・・・惚れ「あーーーーー！！！！今日の任務はなんだろうなーーーーー
ー！！！！」・・・」

なんか滝壺が「掘れ」とか言ってたけど、何を掘るんだ？この地面をか？

掘れ？彫れ？わかんねえ。もういいや。

「まっ、いいや。じゃあ、早速仕事に行くぞ」

「「はーい」「」

「んっ、元気がよろしい」

笑いあいながら場所に向かう。
これからある施設の中にいる人間を全員殺す。

第七話 筋トレ

ある日、オレは思った。

肉体戦の時のために体を鍛えた方がいいんじゃないかと。

「とっ、言うわけでお前らも鍛えろ」

「何で私たちも巻き込まれるんですか。超めんどくさいです」

「ん〜？なんか言ったかにゃ〜ん？き〜ぬ〜は〜た〜？」

「いえ、超言ってますん」

ギロリと睨み、絹旗を脅す。

絹旗は、すぐに先ほどの言葉を取り消した。

はっ、オレに逆らうんじゃねえよ。

「じゃっ、早速今日から行くぜ」

「ん？どこに？」

「どこにつて・・・ジム」

何だよ、その顔。

先生とかに教えてもらうの嫌なんだよ。異論は認めねえぞ。

今、オレの隣には、ばてている三人がいる。
体力ねえなゝ

「おいおい、どんなけ体力ないんだよ」

「む・・むぎのがありすぎなんだ・・・よ・・」

「そうだよ！結局、私たちはか弱い女の子って訳よ！？」

「か弱い？どこにか弱い女子がいるんだ？」

「ここですよ！！」

オレはわざとウロウロと周りを見渡す。

すると、二人がぴよんぷよん飛んでオレの視界に入ろうとする。

はっはっはっ、無駄無駄。180センチの身長のおレの視界にお前からみtainなチビは入らねえよ。

そういうと、滝壺を除いた二人に蹴られたので、一発ずつ至近距離からギリギリ外れるメルトダウンナーを撃つといた。

絹旗ア。お前、能力使ったから痛えじゃねえか。

さて、鍛え始めた日から、何か月も過ぎた。
あん？時間が経つのが早い？気にすんな。こんなことを気にしてたら人生損するぞ。
何を損するのか知らねえけど。

まあ、とりあえず。オレの体は程よい筋肉が付いた。
あれだあれ、細マッチョだ。

それに実践もしてみた。

とりあえず不良に喧嘩売りまくった。まあ、全部勝ったけどな。
これで肉體戦は何とか大丈夫だな。

さうて、そろそろ後ろのフレンダ達も相手を全員殺す頃・・・

プルルルル・・・プルルルル・・・プチ

「あんだよ、クソ女。邪魔すんな。じゃあな」

「アンタたちの暇つぶしになりそうな事件が起きたわよー。見てるだけで楽しいわよー」

「ああ、？連続虚空爆破グラビドン？だろ？これからそれを探すんだよ。じゃな」

問答無用で消す。

まだ女が叫んでたけどまあいいか。

「さーて。さの連続虚空爆破を見に行きますか」

「たのしみだね」

「はい、超楽しみです」

オレの後を、面白そうに3人が続く。

第8話 捕まえた

よく考えたら、どこで事件が起こるのか知りませんでした。
どこで事件起こるんだっけ？

「・・・確か友達が、お花畑のやつがでかいデパートの服屋の中で
巻き込まれてあるって・・・」

そうだったよな？よく覚えてねえけど。
だー！こんなことならもつと友達に詳しく聞いてればよかったぜ！
とりあえずお花畑だよな？お花畑・・・

オレは周りを見渡す、すると、運よくそのお花畑のガキを見つけた。
なんだよあれ、頭パーか？

「何ですかあれ。頭超可哀そうな人ですか？」

「結局、人間ってのは人それぞれって訳よ。そっとしておいてあげ
よう」

「あたまがおかしいの？」

3人がなんか失礼なこと言ってんなあ。
そんな失礼なこと口に出すんじゃないやねえよ。

可哀そうだろ。いくら頭が可哀そうでも

→

お前が一番失礼

てか、あんな頭してよく外に出れるよな。花とれば誰だか分からねえんじゃねえのか？

何だ？周りのやつも、あまりの頭の悪さに気にしない様に氣遣ってみない様にしてるのか？

いい人たちだな・・・

→

お前失礼すぎだろ

「なんだか視線を感じます・・・」

あつ、ごめんそれオレ。
がん見してるから。

まっ、とりあえずアイツについていけばいいんだよな？
だけど、オレ結構目立つな・・・なんか女子の視線が痛い。

→

それは君がイケメンだからだよ。リア充爆発しろ

作者オレに冷たいな。

「・・・麦野・・・これは何って訳よ・・・」

「ばれないように変装しないといけないだろ？完璧だぜ！」

化粧品を片手に、オレは満足そうな顔をする。

たぶん、今のオレに顔はきらきら光ってると思う。

フレンダは黒い髪のカツラをかぶらせて、目元を濃くして目を大き

く。

絹旗は服装をジャージにして、髪の毛も括り、眼鏡。

滝壺はおしゃれな服を着せておしゃれな帽子もかぶらせて髪の毛もパーマにした。

よしっ！これで一目見ただけで分からねえだろ☆

ちなみにオレの変装は、女装だ。

いや、レベル5の第4位がストーカーしてるとか言われたら嫌だし、これしかないんだよ！

髪の毛がパーマがかかった金髪のロングのカツラをかぶり、軽く紅をさし、肩幅が分からない様に肩のところが毛でおおわれている服。もちろんズボンだ。スカートとかありえねえ。

「……麦野、似合ってる」

「そんなこと言われても嬉しくねえ」

女装をほめられも嬉しくないんだよ滝壺。まあとりあえずこれで目立たないだろう。オレ達は花ガキの跡を交代で追いかける。

最終的についたのは、大きなデパートだった。

ここか、ダチが言ってたのは。ここで事件が起きるんだ。

丁度暇だったから犯人をボコッて捕まえて警察にでも突き出すか。
しかし・・・なんでだ？視線が痛いままだが。もしかして男だって
ばれてんのか？

だとしたらやべえな。事件みたらさっさと帰ろう。

そう思ってたら、放送が流れた。

能力を感知したようだ。とっ、さっさと店の外に逃げて路地裏に行
こう。

俺たちは急いでデパートをでる。

「行くぜ」

「超了解」

さっさと犯人氣絶させて帰ろう。
もう視線が痛すぎる。

オレは路地裏に向かう。

すると、不気味に笑いながら学生が路地裏に入って行った。
ラッキー、犯人あいつだな。

オレはにやりと笑いながら学生の跡を追う。

「くくく・・・今度こそ逝っただろう・・・素晴らしい！！素晴らしい力だ！！これで僕を馬鹿にしたやつらを吹き飛ばして」

「よお、ガキイ。こんなとこで何してんだ？」

「！！？」

ひとりで盛り上がったガキに声をかける。
驚いてる驚いてる。その顔が一気に恐怖に変わるときが一番面白いんだよなあ・・・

「邪魔だからさっさと捕まってこい」

「ひいっ！！！！」

ズドンッ

メルトダウナーが、ガキの顔のギリギリを通る。
一気に恐怖の顔になりやがった。
いいねえ、その顔。

「何の力もないやつが、めんどくさいことしてんじゃねえ・・・よお
!!!!」

「ぐぶっ!!」

腹に蹴りを入れる。
内臓大丈夫かなあ・・・とっ!!

ズンッ!!

「げはあっ!!」

もう一発蹴りを入れる。
すると、ガキは吐きやがった。

「おいおい！この程度かよゴミ野郎！！もつとオレを楽しませ・・・」

いや、待て。直ぐにあのガキが来るはずだ。
ここは引いた方がよさそうだな。
仕方ねえ。

「命拾いしたな」

「ぐう・・・ぐはあ・・・」

腹を押さえて苦しそうに息をするガキを置いて、俺たちは路地裏から何事もなかったかのように出る。

すると、すぐ後ろでガキの声がした。

胸糞わりい・・・いつかテメーを地獄に叩き落としてやるからなあ・・・
・・・覚悟しとけよ超電磁砲^{レールガン}

第9話 つまんねえ、もっと

「暑い〜〜〜!!!! 溶ける〜〜〜!!!!」

俺は大声でいう。

すると、周りのやつらがオレを見る。

チクショウ、見てんじゃねえよ。暑いもんは暑いんだ!!!

「麦野くプール行きた〜い!!!!」

「ついでにあの世行って来い」

「何で!?! なんか麦野って私に冷たいって訳よ!!!!」

「それはだな・・・お前の反応は面白いからだ」

「ひどい!!!!」

フレンダで遊びながら、オレは、変わった曲が流れるのを待つ。

そろそろ、クソガキが昏睡状態のカスどもの目を覚まさせるころだ。

・・・てか、ホントに熱い・・・水分が全部無くなって死んじまうぜ・・・

あつ、そういえば!

「プール借りっぱなしだったな・・・」

ぼそりとつぶやく。
すると、フレンダが食いついて来た。
よほど熱いらしい。

「ホント!!? 行こうよ!! 結局、このままだと今日はすることは
何もないって訳よ」

「・・・そうだな・・・行くか」

「本当ですか!!? 超感謝します!!」

「浮いて漂うスペースある?」

「・・・滝壺・・・泳ごうか」

浮いて漂うスペースってお前・・・事情を知らねえ奴が見ればおぼ
れた人にしか見えねえぞ。

せめて、バタ足でもいいから泳げ。

立ち上がろうとしたその時、不思議な曲が流れ始めた。

なんだ・・・この曲・・・五感に訴えるような・・・言葉じゃ表せな
い不思議な曲だな・・・

まっいいか。これで昏睡状態は溶けるはずだ。もうオレには関係ね
えし、正直、こっから先の話、知らねえんだよ・・・
あんまり友達と、とある魔術の話しなかったからな・・・

「・・・不思議な曲・・・」

「こんな曲、どうでもいい。行くぜ」

そうだ、もうオレには関係ないんだ。

これから適当に過ごせば、あのガキと会うだろ。

その時は・・・アイツを跡形も残さず吹き飛ばす!!!!!!

あれから、日が過ぎた。

オレは今、任務をしている。

邪魔者を消すっていう任務を。

「ひいっ・・・ひいっ！！！！」

「助けて・・・げはあっ！！」

「助けて？おいおい、何敵に助け求めてんだよ。助けるはずねえだろうが」

オレは、男の腹をける。

男は胃の中のものを血とともに吐きだし、呻く。

さらに腹をけると、もっと血を吐き出した。

「つまんねえな・・・つまんねえな・・・やっぱテメーらゴミカスじゃあ相手になんねえな・・・」

後はフрендаに任せて、オレは電話をいじり始める。

はあ・・・最近つまんねえな・・・ガキとも会ってねえし。

つまんねえ・・・つまんねえつまんねえつまんねえつまんねえつまんねえつまんねえつまんねえつまんねえ・・・

「つまんねえんだよクソやろおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおお！！！！！！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアッ！！！！！！」

八つ当たりで、近くにいた、まだ息のある男の腕を思いつきり踏み、
腕を砕く。

男は、絶叫をあげる。

まだだ・・・まだ足りねえ・・・もっと悲鳴をあげろ

もっと血を出せ

くそっ、このイライラしてる時に・・・
そう思いながら、相手の話を聞く。

しかし、そのイライラは収まってきた。
内容が面白かったからだ。

「防衛戦」

頭を使うため、少しは面白くなるだろう。

オレ達は残りを始末し、車に乗り込む。

目的地に向かう最中、詳しい説明を受ける。

おもしろそうだな・・・

オレはにやりと笑う。

すると、3人があれこれ言い出した。

「いい？ 麦野。絶対に傷ついちゃ駄目だよ？ 私たちが頑張るって訳だから」

「はあ？ 別にいいだろ、オレの体なんだから」

「ダメです。超駄目です。せっかくきれいな顔が傷ついてお嬢に行けなくなったらどうするんですか？」

「別にいいし。結婚するきねえし」

「それはそれでもつたいないよ？ 麦野」

「・・・なんで？・・・」

ん？ 今、この話どうでもよくね？

目的地につくまで、オレは3人にいろいろ言われ続けた。
こら運転手、笑うな。

第10話 作戦

目的地に着いた俺たちは、すぐに研究所の本部に行き、カメラなどを全て切ってもらおう。

敵は、中心部の大きな機械があるところを狙う、だから、その近くで俺たちは戦う。

カメラなんかあってもオレがメルトダウンー撃ちまくって壊しまくるから意味ねえだろ？だから切ってもらおう。

施設は、2つ・・・か・・・よしっ！

「フレンダ。お前はここに残って敵が来るのを待て」

「ええっ！？私だけ仲間はずれ！！？」

「違うわ」

ちよっとは頭使えよカスボケ無駄脚線美。お前みたいなたな
お子様にはそんな足必要ねえんだよ。

「いいか？残りの施設は2つある。絹旗は、もう一つの施設に行ってもらおう」

「やっぱり結局仲間外れって訳よお！！ゲフッ！！」

「人の話を聞けーーーー！！」

オレはフレンダの首を絞めて、静かにさせる。
死にそう？大丈夫だ、コイツはゴキブリ以上にしぶとい・・・と、
思う。

そのうち、フレンダがオレの手を叩いてきた。

「む・・・むぎの・・・！苦しいって・・・訳よ・・・」

「よし、静かになったな」

オレは絞めるのをやめる。

話した途端、フレンダは必死に息を吸う。その背中を滝壺が優しく
なでる。

いい子だな、滝壺は。

「いいか？襲撃者は単独犯であると推測されてるけどな、一方の襲
撃が陽動であると、可能性を捨てるべきじゃねえんだ。防衛組、つ
まり絹旗は、施設襲撃の報を聞いても対処は俺たち、遊撃隊に任せ
て自陣を堅守する。・・・頭がすっからかんのフレンダでも意味が
分かったかにゃーん？」

オレがそう説明すると、フレンダは仲間はずれにされたんではない
と分かって顔を輝かせた。
すげー、変わりよう。

「分かった!! それじゃあ仕方ないね☆・・・でも・・・」

「でも?」 (にやにや)

「頭がすっからかんって納得いかないわけよーーーー!!!! このっ! このっ!!」

オレをポカポカと叩き始める。

「はっはっ、効かねえな。まあ、オレに本気でしたらどうなるのか・・・フレンダは一番分かってるよなあ?」

「うっ!!」

ピタッと動きを止める。

オレに余計なことをしては言っでは、フレンダはオレから痛いお仕置きを受けている。

ある時は、至近距離からの、ギリギリはずれるメルトダウンナー。あるときは、2階から宙吊り、ある時はプロレスの関節技10連発(10秒間) ある時は刃物を振り回しながらの楽しい鬼ごっこ。ある時は・・・ありすぎて全部言ったら日が暮れるな。やめよう。

「それじゃあ、麦野。行ってきます」

「おう」

オレは笑顔で言う。

絹旗の顔が少し赤くなっただが・・・いきなり風邪ひいた？まじ？
慌てて引き止め、熱が無いかどうか、でこ同時をくっつけ、大丈夫
かどうか聞く。したら、顔をさらに真っ赤にした、焦って逃げる
ように行ってしまった・・・オレの顔恐かったのか？

「・・・オレの顔って怖い？」

「「全然」」

「そうか・・・」

だったら何で逃げるんだよ絹旗。オレは少し傷ついたぞ。

~~~~フレンダ~~~~

「ふう・・・」

私は、ヌイグルミに囲まれながら、あおむけに寝転がる。  
そして、先ほどの絹旗と麦野とのやり取りを見て・・・腹をたて、  
ヌイグルミを投げ飛ばし、ものにあたりはじめる。

「くそっ！！絹旗ずるいって訳よ！！！！結局私だって麦野が好きな  
んだから！！！！・・・羨ましい~~~~~~~~！！！！」

麦野とでこ当て！！！？でこ当て！！！？絹旗ずるい！！わざと顔を赤



くしたんでしょ!!? そうでしょ!?

さすが、見えそうで見えないギリギリを考えて計算してる絹旗! 結局頭賢い!!

・・・はぁ・・・私も能力者なら・・・頭もよくなって麦野とラブラブする作戦を立てまくれるんだけどなぁ・・・結局、自分が持つてる才能が無かったって訳よ・・・

「ライバル多いもんな・・・どうにかして私に惚れさせるんだから・・・」

絹旗に八つ当たりしたってしょうがない。

いまは、どうにかして気を引かないと。麦野の美貌だから、男子の中でも麦野に惚れてるやつはいるだろうし・・・女子なんか、麦野を見た途端、目がハートマークになってるし・・・

・・・麦野は私のものって訳よ!! 絶対に恋人になるんだからーーーーー!!!!

私はまた暴れ始める。

その時、足音が聞こえた。

暴れるのをやめ、私はニンマリと笑う。

そうだ、ここで侵入者を一人で倒して、麦野に褒めてもらおう。

私が強いことが分かれば、結局、私と麦野の距離はぐっと縮まるって訳よ!!

そうと分かれば・・・直ぐにいかないとね♪

私はスキップで侵入者のもとへ向かう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5846x/>

---

男のオレが、転生でとある魔術の男の麦野に転生！！

2011年10月31日15時25分発行